

唐突ですが、円谷英二の特撮で有名な怪獣ゴジラは私と同年(1954；昭和 29)の生まれです。正確に言えば、ゴジラはアメリカの水爆実験によって、深い眠りから覚まされたのです。1954年3月1日、ビキニ島環礁でアメリカの水爆実験が行われ、日本のマグロ漁船第五福竜丸が被爆する事件が起きています。ゴジラの映画は水爆や核に対する抗議・批判を表していました。その映画撮影中の9月23日、同船無線長の久保山愛吉氏は肝臓障害で亡くなっています。

この頃、日本映画界は最盛期を迎えていて、昭和33年(1958)になると、全国の年間観客数が史上最高の12億2,745万人に達しました。国民一人当たりだと年間12.3回も映画を見たのです。因みに、平成14年(2002)の全国の観客数は1億6,077万人、年間一人当たりは1.3回ですから、当時の賑いは相当なものだったでしょうね。娯楽と言えば映画、映画は娯楽の王様でした。

さて、映画の始まりとなりますと、今から100年以上も前のヨーロッパにおける出来事です。日本では、前年に始まった日清戦争が終結し、下関で講和条約が結ばれた頃となります。

- 映画の誕生は1895年12月28日のパリ、キャブシーヌ通りにあった有名なレストラン
- 「グラン・カフェ」における有料一般公開(一人1フランで観客32名)であったとされて
- います。リュミエール兄弟(オーギュストとルイ)が発明した映画機械シネマトグラフ
- による上映は、「ラ・シオタ駅への列車の到着」とか「赤ちゃんの食事」といった、わずか
- 数十秒程度の断片映像の寄せ集めでした。とはいえ、列車が近づいて来るシーンでは、
- 観客が席で思わず腰を浮かせるほどで、迫真の映像の評判は上々であったようです。
- 2日目以降は満員となり、18週間連続のロングランになったと伝わっています。

興行としての映画は上記の通りですが、そもそも映画が必要とされたきっかけは16~17世紀のヨーロッパにおける宗教改革の動きでした。ルターやカルヴァンよりかは少し後のことです。

どういふことかと申しますと、勃興する新教の勢いに苦慮した旧教会側が、「新教は邪悪」だと信徒や民衆に訴えるために、反撃用プロパガンダとして幻灯機による映写を実行したわけですが。ガラス板に描かれた絵を石油ランプやガス灯で照射する静止画ですけれども、新教は地獄からの使者であると、盛んに強調したようですね。要するに、映画の始まりは娯楽のためではなくて、言論・思想統制が目的であり、言うなればネガティブ・キャンペーンであったということです。

映画というものは、プロパガンダの道具とならざるを得ない宿命を持つのかも知れませんが、後年のナチス・ドイツのヒトラーなども盛んに映画を活用したことは有名な話ですね。

ところで、映画は「ムービー」と呼ばれるように、やはり動画こそが本命です。本格的な動画はセルロイド・フィルムが登場して以降のことですが、詰まるところ「網膜残像原理」の応用です。1秒間に十数コマ以上、図柄や動作の違った静止画を送り続けると、あたかも連続動作しているように見えるという仕組みですね。(因みに、今日のアニメなどでは24コマ以上です。)

米国のエジソンはリュミエール兄弟よりも前に、この原理を応用した「キネトスコープ」という覗きからくり装置を発明していたのですが、これは一人ずつからくり箱の中を覗き込む方式で、観客が一斉にスクリーンを見るという、映画と呼べるスタイルではなかったのです。エジソンは直ちに對抗機ヴァイタスコープを発表しますが、栄えある称号はリュミエールに輝きました。

京都の映画史を語る時、マキノ省三と尾上松之助の名コンビであるとか、松竹や大映という撮影会社の存在が有名ですが、事の始まりは一人の実業家(稲畑勝太郎)に負うところが大きいです。彼とリュミエールとの出会いが、京都はもちろん、日本映画の幕開けを告げました。

### 稲畑勝太郎 (文久2年・1862～昭和24年・1949)

京都というよりも日本の染色業界で活躍した人物で、後年には大阪の商工会議所会頭を4期も務めた実業家です。日露戦争直前には迷彩効果の高いカーキ色軍服の製作に成功し、明治37年以降には日本陸軍から一手に請け負ったエピソードは特に有名です。余談ながら、カーキ色とは赤褐色を帯びた黄土色であり、カーキとはヒンズー語で「土ぼこり」の意味です。

そういう彼が映画と関わりを持つことになった要因には、次のような転機がありました。

- ①幕末の禁門の変(蛤御門の変、1864)による大火で生家(京都の生菓子屋)が焼失した。
- ②京都府師範学校に進学し、在学中にフランスへの留学生8名の一人に選ばれた。
- ③留学中の専攻学問を染色と指示された。→オーギュスト・リュミエールと学窓になった。

②と③については、京都のフランス語学校の教師であったレオン・ジュリーと縁があります。彼が6年振りに帰国することになり、これに合わせて青年の留学が決定されたのです。引率役と指導員を兼ねていたジュリーは各人の専攻学問の指示も行っています。タイミングや専攻学問が稲畑とリュミエールの出会いを決定づけたのです。また、留学の同期生に横田万寿之助ますのすけが居り、このことが後年に彼の弟(横田永之助)と巡り会うきっかけともなりました。

7年半の留学から戻ると、一旦京都府勸業課に奉職した後に独立して、日本織物会社を設立し、さらに稲畑染料店を開業して大成功をします。モスリン紡績会社を興した時には3度目の渡仏を果しますが、この時に旧友リュミエールの「シネマトグラフ」を見て、魅了されてしまうのです。西洋の近代化を日本国民に知らせる手段として、映像に勝るものは無いと判断したようです。帰国時には機材とフィルム、ジュレルというフランス人映写技師、そして東洋での興行権までを携えていたそうですから、かなりの入れ込みようであったと思われます。

その年(明治29・1896)の12月、日本初の映画の試写会が京都電灯会社敷地内で催されました。四条木屋町からは少し北に行って、現在では飲食店に混じって関西電力の変電所がある所です。尚、試写会と申しましたように、この催しは有料の一般公開ではありませんでした。一般公開が初めて行われたのは翌年の2月15～28日、大阪難波の演舞場でした。続いて大阪の道頓堀角座、4月には京都の新京極でも行われ(一人8銭)、大変な盛況であったと伝わっています。

しかし、稲畑の映画事業はまもなく頓挫し、事業を先述の横田永之助に譲ってしまうのです。フィルム現像の失敗とか、入場料の60%をリュミエール側に支払う条件がやはり重かったこと、さらには興行における旧態依然とした慣習にも嫌気がさしたためとされています。その反面、稲畑はカーキ色染色の研究開発に邁進できたわけで、結果的には良かったかも知れません。

ところで、横田商会は日本初の現像所を始めたことで有名ですが、後年には東京の吉沢商店をはじめ4社が合同して日本活動写真株式会社(後の日活)を設立しました。この頃になりますと、上映できるフィルム作品が不足しており、国産フィルムを作る機運が高まっていたわけです。

## 日本の Hollywood

明治末頃、欧米輸入の映写機を用いて、主に東京方面では現代劇を、そして京都では時代劇を撮影する映画の勃興期を迎えました。しかし、大正12年(1923)の関東大震災の大打撃によって、東京方面の撮影部門が京都に移ってきましたので、京都は一躍日本一の映画の都となりました。

ことに昭和10年(1935)頃の<sup>うずまさ</sup>太秦地区などは、日活やマキノトーキーをはじめ8撮影所が同時に集中するところとなり、「日本のハリウッド」と呼ばれるような活況を呈していました。

役者もスゴイですよ、阪東妻三郎・片岡千恵蔵・市川右太衛門・嵐寛寿郎・大河内伝次郎など時代劇スターが勢揃いしました。皆それぞれに当り役というのがあって、例えば嵐寛寿郎ですと「鞍馬天狗」ですね。その時、角兵衛獅子の杉作少年を好演したのは幼い頃の美空ひばりでした。ところで鞍馬天狗の正体をご存知でしょうか？ 実は勤皇志士・倉田天膳とのことです。

余談ながら、撮影所建設当時に周辺の竹藪を伐採したところ、石舞台のような遺跡が現われ、今では蛇塚古墳と呼ばれますが、秦氏ゆかりのものとされています。どうも太秦というところは、外来の文化を呼び込むような運命を持っていそうですね。また、今日では東映太秦映画村があることで観光名所にもなっていますが、昭和42～43年頃の計画では滋賀県の雄琴の丘陵地帯に予定されていたのですよ。しかし、大映・大川社長の急逝で、その計画が一旦は白紙に戻ったわけです。現在の映画村は、計画が見直された上で昭和50年11月1日にオープンしたものです。

永田雅一という名物男がいました。卒業した小学校は私と同じですね。昭和22年に大映社長、25年には『羅生門』(黒澤明監督)でヴェネチア映画祭のグランプリを獲得しました。その一方でプロ球団の経営にも乗り出して、24年に大映スターズを結成、28年には初代パリーグ総裁に就任しました。また、ロッテのオーナー時(44年)には、元東京オリンピック100m走者の飯島秀雄を代走専門選手としてデビューさせるといった、人も驚く型破りな話題を提供してくれています。さらには日本映画全盛期の頃、どの映画会社も株主配当2割を実施していましたが、永田社長は何と6割という芸当をやったのけたのです。メチャクチャですが痛快な人物ですね。

**だるま寺 (法輪寺)** ……上京区(嵐山にも同名の寺があるが、それとは別です)

映画ゆかりの地が多い京都ですが、ここは隠れた名所かも知れません。本堂の隣の衆聖堂には仏の涅槃像などとともに、歴代の映画関係者(経営者・監督・俳優)の霊が600余柱も祀ってあり、「キネマ殿」という名称がつけられています。約8,000体の、米粒大から木像の大きなダルマまで置いてあり、それが寺の通称となりましたが、臨済宗妙心寺派の禅寺です。

## 苔寺余話

大仏次郎の作品『帰郷』が映画化された時の話。南方から復員した守屋恭吾が娘の伴子と会う場面の撮影は、当初は原作通り金閣寺の庭が予定されていた。しかし、金閣寺が燃えてしまった(昭和25年の放火事件)ために、やむなく苔寺(西方寺)を代わりに使ったわけです。そのことが苔寺を広く知らしめる契機になったそうです。